

【配点】  
 ① 1・7・8 ② 3・6・8 ③ 1 各1点×12  
 ④ 2 各2点×6  
 ⑤ 3・6・8 各6点×6  
 ⑥ 3・6・8 各6点×6  
 ⑦ 3・6・8 各6点×6  
 ⑧ 3・6・8 各6点×6  
 ⑨ 3・6・8 各6点×6  
 ⑩ 3・6・8 各6点×6  
 ⑪ 3・6・8 各6点×6  
 ⑫ 3・6・8 各6点×6  
 その他 各4点×10

1

異文化	について	書かれた	本や	文献、	資料
を	読む	だけ	では	なく、	長期に
に	現地	に行	って	みる	

(同意可)

2  
 文 しょう  
 (完答)  
 3 フ しょう ク  
 (完答)  
 4 エ  
 5 様々  
 (完答)  
 立場  
 6 オ

7  
 保護観察処分にとどまり、南西太平洋地域での現地調査の許可がおりたうえに資金提供まで得られた

(同意可)

8  
 人類学者自身の長期のフィールドワークに基づいて書かれた民族誌が蓄積されていったことで、機能主義的な見方が根付いていったから。

(同意可)

2

1 栗原大也  
 2 イ

3  
 あえてお金があることを知らせ、以前から泥棒であるという噂が立っている大也にお金を盗ませて彼をおとし入れるため。

(同意可)

4  
 イ・オ  
 (順不同・完答)  
 5 A エ B イ C ア D オ E カ  
 (完答)

6  
 大也と戸田は先生と生徒の関係なので本来友だちとは言えないが、戸田は生まれて初めてほどよい接し方でそばにいてくれた存在だから。

(同意可)

7  
 欲しいものを自力で手に入れる

(同意可)

8  
 過去の過ちは消えることにはなく、いつまでも自分について回る

(同意可)

3

① 報復	② 保管	③ 厚顔	④ 暑気	⑤ 快方
⑥ 曲解	⑦ 使命	⑧ 標本	⑨ 有終	⑩ 墓前
⑪ ふんべつ	⑫ まぶか			

2  
 ① 天  
 ② 外  
 ③ 世  
 ④ 成  
 ⑤ 兵  
 ⑥ 馬

1

- 1 指定の形式を守ることに注意しつつ、前段落までを要約する。「本や文献、資料」だけでは理解しきれない「謎」を解決するべく現地調査をするのである。傍線直後の「突き詰めた」という表現に合わせ、「長期に渡って」という要素も必要である。
- 2 マリノフスキ自身が行った「参与観察」についての説明をたどっていく。次段落からは「旧来の人類学」の説明が続いているが、ここからさらに読み進めていくと（B）を含む段落以降、マリノフスキが異文化を理解するためにとった行動について書かれている箇所（カシ）にたどりつけるだろう。「実地に調査に出かけ」ることで、「文化をより深いところで捉えよう」としたのである。
- 3 「何をしなかったから」という表現に注意する。「19世紀の人類学者たち」が行っておらず、「マリノフスキ（以降の人類学者）」が行っていたこととして、本文中で繰り返し述べられている「フィールドワーク」にたどりつけることよ。
- 4 Aは前の部分をまとめた表現が続くので「要するに」が入る。Bは「頭の中だけ：限界がある」からマリノフスキは「実地に調査に出かけ」た、という流れなので順接の「そこで」が入る。Cは「現地調査（のための奨学金が認められる）」と、その現地調査中に「第一次世界大戦が勃発し」てしまうというアクシデントの発生をつなぐため、逆接の「ところが」が入る。Dは「個々人の姿」を「描き出した」とことマリノフスキが提唱したことが並べられているため、並列の「そして」が入る。
- 5 本文後段において「民族誌と機能主義」についての説明が始まる段落がある。それ以降をたどっていくと「機能主義とは要するに…」と述べられている箇所に行き当たる。
- 6 「旧来の人類学」についての説明をたどる。アの「参与観察」、イの「異文化の中に入って」、ウの「全体をまるごと理解する」、エの「…ひとつの統合体こそが文化である」は「マリノフスキ以降の人類学」の手法や考え方である。
- 7 傍線を含む段落を読むと、マリノフスキが「この機会を活かし」て「長期のフィールドワークに出かけ」たことが分かる。「長期のフィールドワーク」に出かけることができた要因は直前の段落で述べられているのでそこをまとめる。
- 8 「マリノフスキ以前の人類学」では人類学の専門家ではなく、探検家や旅行家、宣教師などが記録した二次資料を中心に（実地調査をせずに）研究を進めていたことに對して、「マリノフスキ以降の人類学」では人類学者自身がフィールドワークによって得たものを民族誌として書き残し、蓄積していくようになったと述べられていた。

2

- 1 三上のことをよく思っていない大也が、三上の言動、行動に對して「舌打ち」して不快感を表している。本文後半で戸田が大也に對して「それは栗原が気の毒…」と語りかけている。なお、「鳴海」は「翔」の名字である。
- 2 一文を読むと「三上は…大也に向けてきた」とあり、大也に對して何かを言いたいのだろうと読み取れる。後続部分の「…やっぱ泥棒は違うな」、「…赤ん坊の頃から万引きして…信じて言うほうが無理じゃん」からも、三上が大也のことをどう思っているか、そしてその大也と並木商店の泥棒とのことを関連付けて考えていることが読み取れる。
- 3 大也以外のクラスメートが封筒の存在を認識していたことから、隣の席の女の子はあえて大也に「内緒」と言っていることがわかる。「ほらね…やっぱ…根っからの泥棒だよ」という言動からも隣の席の女子の狙いが読み取れるだろう。なお、少し後の部分の「はめられた」とはこの場合、買、計略にかかったという意味である。
- 4 「ふさわしくないもの」をすべて選ぶ。直前の場面で大也は隣の席の女の子（やクラス全体）の計略に乗せられてまんまとお金を盗んでしまい、そのことで先生達に責め立てられるという事態に陥っていた。周囲の自分に対する不信を感じとっていること、また自分の考えを上手く言葉にできないことに對するいらだちなど様々なことがらを原因として、鬱憤が爆発しているのである。翔とは出会う前の回想の場面なのでイはふさわしくない。「自分を信じてくれていた」の部分より、オもふさわしくない。
- 5 会話文のやりとりでは、それぞれが誰の発言であるのかイメージをつかみたい。Aは暴れる大也を制止する際の戸田の言葉なのでエが入る。この部分は一見大也の言葉ととれなくもないが、各選択肢と照合して絞り込みたい。Bは直前の「もうちよつと…」や直後の「いま十二月だぞ」に對する言葉なのでイが入る。Cは直後の「あっさり」と戸田は領いた」に對する言葉としてアが入る。Dは直後の「犯罪だって知らなかったんだ」につながる言葉としてオが入る。Eは後続部分を読めばここで戸田が大也に伝えたいことを言い始める際の言葉としてカが入ることがわかる。
- 6 戸田は大也にとっては同年代の友だちではなく教師である。「友だちのような接し方」といった説明ではやや説明不足だろう。友だちのような「どのような」接し方なのかを捕捉しておきたい。
- 7 どのような文脈での発言なのか、前後を読む。「ウエットスーツ」や「サーフボード」が欲しいが貯金がない。しかし「リカ（母親）」には頼りたくないの、自分でお金を稼いで購入したいのである。短い制限字数の中に要素をおさめたい。
- 8 直前の「戸田は学校を辞めた」と、傍線を含む一文の「…身にしてみて思った」に注目する。戸田の過去の行いが周囲に知れ渡ったことが、戸田の辞職の原因であると察したのである。同時に以前戸田に言われた言葉の意味を大也自身の状況に置き換えて感じとっている場面でもある。

3

- 1 ①「報復」とは仕返しのこと。②はうっかり「官」としないように注意したい。③「厚顔無恥」は厚かましく恥知らずなさま。④「暑氣払い」とは暑さを打ち払うという意味。⑤「快方」は病氣や怪我がよくなっていること。なお「容態」とは病氣や怪我がよくなったことである。⑥「解」は「牛」を「午」としてはいけない。⑦「使命」とは与えられた任務のこと。「指名」や「氏名」といった同音異義語に注意しよう。⑧「標」は「よく見えるようにする」という意味を持つ漢字である。⑨「有終の美をかざる」とは最後までやり通して立派な結果を残すこと。⑩は読み方によって言葉の意味が変わる熟語である。⑪はふだんあまり見ない言い回しなので、ここでしっかり覚えておこう。
- 2 ①「有頂天」とはうまくいった喜びで夢中になっていること。「点」と書き間違えてはいけない。②「度外視」とは問題にしないこと。③「出世頭」とは出世が最も早い人のこと。④「未成年」はまだ成年ではないこと。「青」と間違えないようにしたい。⑤「生兵法」とは中途半端な知識、技術のこと。「なまびようほう」と読む。⑥「走馬灯」とは影絵を利用した回り灯籠のこと。この場合回転しながら次々と影絵を見せるさまを、過去の記憶が呼び起こされる状況に重ねている。

以上